枇杷園類題發句集 下

稚拙文庫

類題士朗叟句集巻之下

秋之部

立秋

ちらめくや秋立ぬ日も雀

秋立や蓮の葉買に池めぐり

猶虫

夜に寒蔦て秋寒る立とりぶ

秋ちかき色は物さびしや蔦の家

立もとも色ぶさて来ぶり高乃秋

ふり秋に目ふこりみるも 湖の雲

初秋

ちゝ秋の川瀬よ言小さく孔
初雁の麻つきつる蓬うの車
うき出る方を初秋の白つゆ
蚤蚊よせらまて眠るもと
笑ふる様情の方さかさ
しけなく覚へく

今朝秋

漢ちゝふちゝも死なて孝れ秋

一葉

庵乃戸へ拾ひ入きり相一葉

雑詠

竹の竜の油ちるる　桜の那

七夕

古里れ子よ子ありり星まつる
大膳や東川をする星乃書
かも川や堂ふ秋やう流る星の夕
兄弟のきちあるひやほ象
乞の川紅のもくみ乞ふ市町
七種のもゝ流ふかも天れ川
何まの川元こもほ乞ふ
もゝきゆる言れ中より乞乃川

天の川

舟行

一枠子ゝ漕つもよ玉の川
水あのよ鳥もりゝあすの川
多萬子むり〳〵来ゝ登れ月

盆月

亀祭

書き祭ゝ亀祭

角力

蕨ゝ根乃小家より〳〵角力

露

世よつゝ人ゝ世ゝや登れ家

都貢ゝ百ゝ贈徐英

ふ天ゝ月ゝ出ぬ秋ゝ

屋寿ハ広重ゝ小亀

素外法ゆゝ知ゝりの迹絶れ月
を見ゝ妙もゝく世いつる
人〳〵ゝ身彼れ寿何法師

華清の紀風なり

白露ゝ玉ゝ集ゝあつめゝる世ひゝ

檀渓

家ゝ音あゝり雑住なるもゝく祭の烟
山乃や松ゝ枝ゝ折ゝる笠乃雨

得車一字

霧

新霧の関を入るを車うの車
出るゝ乃ふるさとのなつかしき雁の海
秋きりや板ぶきつゞく塩屋多
深林子雁多しきる新明ぶ

稲妻

いな妻や絵よりもしき夏の雲
山と居もとは岩ちるる海の上
舟うよりうく

稲妻ふ瓜つく波ばけ法こぶ
あき風やあへり舟うあへり弱

秋風

秋風子拾ひ補形ひ月表ぶ
須磨寺を戸を開ふ乃り秋ど風
鶏風ひかきもりしを鶏の月
門をゝゝ言や祝上ぶ坊丈ぶ風
秋姫やあ風ら茅木乃巻なるゝ
あき風の休吹高角ら提の事
山ひとりや月よゝつく秋ぶ風

悼松兄

むつまじきうきをを幽茅ぶ

中ちいつてきましこゝ　此松見ハ
オ子をつ子ふ子ハ生ちのうく
年の數もいとゝうく老を捨て
先ちつまゝしきなゝひうちふか
ちゝれちゝ子けきハなうちゝや
新風や小り寒もなき表れ鶴

本槿

むしゝきうやまゝき本槿よ花一ツ

朝貌

初やくゝふゝ蕣のさく頃新ぶ
朝さりゝ朝貌ちなし新ふゝ

いゝ〳〵程の世を朝顔の書乃枝
數屋こしる朝貌ふ旅疲ふ
朝貌ふうこゝよ人の訪ふ度よ
きゝしさやを朝蕣の花一り
あさゝ毋や白ハ小車ハ花の上

蕣花

蕣花ちなゝ世ハ日の洗しさよ蕣の宮
殘りちゝく咲ちうこゝ女郎花
をゝちゝくしゝ都ゝ紅ゝ名ゝ
やきゝくゝと君ゝ古人ハ白ハ

萩

萩もまく浮世のうちハかくもうゑ
家萩やまもひ捨うる縄もさま
のとくまて物うゝ萩のゆくゝ
よきい花よりとくまきはゝ小庭ゝ

一句井

うゑ枝ゝてちゝ写ゝ居うり萩芝
萩よゝ和まもゝまきにゝる西ゝゝ

野秀亭萩見

萩の雨あゝゝは兼て萩のゝ多

萩

雨ゝ雨やゝ門のうゝきて萩のゝ
小俳家て
萩ゝゝや垣ゝ面の大ゝしき
山里や拂ゝも叩ゝ萩の門
萩ゝ立ハり焼ゝけ残る西の葺
人ゝやあゝのさゝゝゝゝる萩乃原
萩芝ゝ家の朝夕ゝてしゝ
虹の粕やゝ雪りゝ乃萩の多
こゝもとゝゝも老ゆゝゝものゝ萩ゝ多

秋蝶　妹のてまの回し木陰を飛ぶ多

秋虫　鳴むしの小地や小町が髮ゆ蔦

蟲　きりぎりすやいつまでも瓜の花

鳴る夜のあしを鳴うきりぎりす

なくは悲しし鳴くは寂しし蟲

死後の枕上まもしまんと

いのちの丈夫の墓所

泣く

虫　掘ればて虫をもちうり塚の草

庭雅　ハ庭甫の蓋子つまをを

なくさめんと蟲をもりふるつ

掘り来ていり不庭ともてなれハ

ゆくゆく鳴めぬ

虫ハ多夜もをりし虫ハ鳴せむる

むし籠やあり戸の内うつ雪乃枝

寵馬

鼻紙ハ初さくら初ものいとくうを

八月　八月や海ハ夜もうつくしき

八朔　仏馬や地ハ八朔ハ里　壹

題詠なる月

ありてなすき月和を柴の烟ゞ

二ゝ月　不破まてらさし日のゝれし二ゝ月

林間

萩丈やそこゝも志りし　二ゝ月

三ゝ月　三ゝ月や小さく北宿の家ゝ友

三ゝ月をいつきなそその名残ゝ

初月校　山里やゝりふ祝ゝ月和

五日月

多ゝ来ゝ萩よめきそや初月和

五桂

初月　まてるまて偽き和ゝ宿

今日月　萬代や山のうへよりふの月

三ゝ月ゝ　くまてゝりめゝふの月

帯梅亭

盃をあけく山月似ゝ

茅と投しゝ加園を無ふ

ゝりひゝ友ゝ花つきの友ゝこれ

あるひとの
なりさまは
海山のけしき
主人はなく雅情
伝記

花をも
名月
名月とふ
良夜
名月

ちまてきこと揚句

霧雲降り雨をさそうめてしの名月

雨の日伝懐あり人と語りて

姉妹を雨よ名ちめぬ名ふ乃月

月もまたしちうくも雨形芝ぐ

某月寺

雨月

雨ちしやみもあもり暗お宮

降ちすす月やゆ俗ゑれ森の陰

ちしちもあて月る雨拾小庵ぐ

須磨あり

ひちゆ雨に降おれち

あ中しき中家ちしちを入て

海人ち家ち神ちもち俗月の雨

あしゆんちる焼

月

俗ちまれ猫も月に名ぐ

明石まて

月こちてちる位ー 陸奥 盆

山家ち言ちる月ちしき

訪し侍るとはなやくる寒さに
主おて此千根の縁の藤の釣
ちらく来るさましさしつるし
侍るなるも心しあるよかるそ
縁よゝき根とおりし為

萩
あんけてもふかれねくり萩と月

巣燕に黄土を運ひこのむし
乃まゝをとしらく住ふ一室
なる晃して曉露ゆく

ある蘭鳥の栖なるを

曉
明あさてらより月起りれ
は数つく打ましき月夜の
出の家の庭の葉の口と
恐しきことを終ハ恐りし
ここに見え来りつき

松
たけれもや月まてきたる

雨晴山月高

海
山と流れあけたる月松が

卓池亭

[illegible]月の[illegible]蓮[illegible]れ
享和壬戌七月既望 杉[illegible]
木屋[illegible]長崎中の浪花の
魯隠あると東坡の赤壁乃賦と
[illegible]詠をつゝみ侍魚蝦の
三[illegible]を得[illegible]
魚と水との心と自もある者ゝ
杯向[illegible]

畫讃

海老を[illegible]ふ 佛[illegible]孫も自知ゝ
雨後
自[illegible]水の砂の形
[illegible]年[illegible]
[illegible]月や杉の根 [illegible]上
[illegible]

青々と青葉のうちの月を見
ひやひやと月しきりある木のるぶ

白岡寺

幽谷里や老れ寐覚手に出る月

富山寺

青々と雨すて衣打ちある月板れ

秋寒し一つ目の老人

目覚やきまく老とせつや月打入

熊河寺

月の夜八門すておもひかしこ
ゑとり岳は獨淋しや青月板
松代寺青しや月の豆
秋の夜八明てもたゝし月板ぶ
いさよふ月こそ居き月の上り口

十六夜

十六夜や月なりの蔭の多

井戸田寺

十六夜もとく月る立所ぶ
いさよひや淋の紙燭して休の夜

八月十六日瓢合とゝのうを

十六宵の闇もまぎらす瓢の秋

十六宵雨　十六夜は雲もなきを小雨の宗

彼岸　蓮寺の鐘も聞きく彼岸かな

芙蓉　月宵〳〵芙蓉ゆふく花の影

薄　陽炎の秋もあらう花すゝき

唯多ト蔦て、かゝるすゝきかな

蟬地の鳥は方を変きゝかな

はるかなるおてまたほのまくき糸

雲雨の墨ねはまん　芒かな

都しるゆ

法師のもくきを待る雨夜の雨

旅人乃水は呉姫乃芒かな

雨はやむ夕潮江のまくきかな

稲花　湖の水のひくさよ稲乃花

碓　小夜ぎぬ寒の東八義し

夕月は舟よきこゑの砧かな

友風亭

秋はなのあらひたて梅雨
ちるかく黄色なる中
老母茶はを書くとしうりを
ゆゝしみとりと交て野色の
家色とうることとく月花瓶
の活こゝ砧の叟句せよゆゝ
ゆきれしうりゝ秋は雨
永く雨より降て夜の氣色

蕭鳴

しいてとい
萩をとゝ苔をとうゝて
小枝きゆし月は鶴も
小松ゆゝ伊賀も
我夢ゆ
多くれて
夕くゆ鳴の
しき立や影
湖の音初

蕭鳴

初虜

萩をとゝ苔をとうゝて きゆきぬ
月は鶴も 雲やれく
伊賀も 砧は夕 可組
夢ゆ れて 鶴うれ
ゆ くれて ゆ 鳴ゆ
の もれ 萩の
立や影 うはの 音は雲
湖の音 初 ときて

雁

三河の国横堂を行かんに
小舟に棹さして矢矧川
北へ流るゝあるを
見れば おのゝ空ゆく多くや
浮雲にて 雁の渡るを早 こゝろ
かなしくもやとて 門田に
居るもの 鳥のまして 雲田に
十ばかり 枝葉 しきて 雁乃多

あまたゆくのみにも 雁乃多
雁 雲の多 みねのある川 東ぶ
子東の 東武まゆく 秋
高海 ふかくゆく
雲の 来ゆく
雁乃 同し 義を 多
童謡
雁し 笠 なれあるの
先へ なるも 先乃 あるくもも

穂になれし竿になすゝき竿に
なれ穂にすゝき磨くさすかに
なすき

小鳥渡

厂むしりさかれ家となりにけり
山とこる小鳥にしらり書東

鹿

鹿老て妻恋しと鳴夜あらん
それとけもかしりは鹿の声
鳴果てかなしさも鹿の鳴音かな
鹿鳴やふかの山の萬家二ツ三ツ

羅城亭小集通題

鳴為をゆきたとへん鳥月秋
音聞山書江の暮かけり
あきらく
門をてまわり人もなし鹿乃声
秋篠山の蕭和田の庭ゝ
いつの家に宿りて
鳴鹿声より深き栖の郎
鹿の声や精も月乃宗して

朝風や鹿追ひし老ひ多
奥山やしきぬるまでしる荒の赤

金華山を岐阜中納言の
城なりしかや突瓦として
鳥道始うく鬱くとして
崔嵬たり

りやとて路なき鹿を峯の杉

賀

秋千歳毛白き荒のあゆ心

稲刈

稲てしやかりや田よ葉多畑

案山子

老の方の作りかしこしかし
おもしろきくまてかくしてか
見る子

秋かぜやあるよ落ちる鳴子
引捨て屋敷なりける武
尺扉見て久しき野くつれ

獣

唐桑

庵きひの垣ゆふ自ら砌の苔

菊

葉いつも忘きて心をまり蜀

寛中九日

旅人より一枚うきよ菓の花
公事乃ちゝてきしゝ黄菓ゝ
却ゝ月よ才ゝ老ゝ也ぬ菊花
送芳西菊
月と菓ゝ乳ゝ山ゝ
贈花舞帰
父母をうきしゝさよ菓の色
ゝ菓ゝ山路ゝ
訪菊庵

うゝやまし菓もつゝぬ庵乃庵
菓ゝ翁ゝ八隅者ゝきゝの色
菊ゝ園ゝ幕紙
しゝゝて
花毎ゝ菓ゝ八重ゝ
菓の香ゝ
信ゝ
花ゝ
ゝ桶ゝ黄菊を一

雪をしらるや菓より蔦の紅の秋
菊の香や結めくる牛乃爽
きくのうやや秋生ハしる豆のつる

蘆門

菊の名ら忘きり菓の門
梅ちる人来しるうるて
水月庵ふるく菓ハ人乃
深切ま花多

ちる雪ふ一身てや菴の菓ん蘇

半閑舎を山を額ふあて
水を脚ト踏てちつの
杉間を月をうるる出る
月を杉ふるあを蔦月ハ
りを立てうえ去ふどよの
自然もるとをつふ栖
なりう

後月　半ちるおふ人あり後の月
後の月源ちり人ハ陽書

梅ヶ谷より四人にて五人も月見ゝ

十三夜竹亭

後の夜を蕨やくちくや月の雲

蕨の月のうけもや月は十三夜

瀧山寺　おうつるさ　岱岳ノ

別荘ヨリ入る

紅葉

紅葉ふしてて唐ゝ柚味噌の白しぶ

帰りに来ぬ水みえしくれぶ

日暮て五老峯よりうれも

枝はうりかたてなしくもも

紅葉を席上ゝうち教し

なまは新田川と紙に書て

ひさうる許ゝ風流も

似つよしいとかき郎く生て

つき行く

一家内、蕨白かしやちる紅葉

平一齋ゝ紅葉ゝ千浪志の

麦ゝれ芦月傳　秋田乃

偶成り時はしらずしてやゆきの義経

郊外の晩秋

芝ちるとさとはつるる夕べ

秋山　杉で久しき杉を見れば秋の山

宇治つり時をうらし秋の山

秋水　鴛鴦は毛衣深しあすの水

葛三本訪琵琶園通歌

秋の和　あすより始れるの食ひまを

秋暮　あるこうる山はこうさとあきのれ

偶成り時はしらずしてやゆきの義経

山は語よ義経の

海山はあきをしやうの夕べ

落葉　さくらやくうらし落紅葉

柿　赤柿のあるれハもしらぬ朝ぐ

菜萸　山菜萸よつて義経の小雪ぐ

杜若　杜若よ杜若を唐乃物ハ細

夏菊　夏菊

尾花　ゆりやと尾花の橋は高

[illegible]山やしとまりて秋の雲
松風や松よりくだるあきの雲
白妙の衣乾すらかなれども秋の雲
小こうきい畠遠なりけりまれなる

秋夕

秋雨とのこゝろ夕の車
星合や水うもあきちゆくゝ雲
芝かるゝ秋くるものなり秋の夕

秋戸

川風や蚊もまれ秋ゆ多
秋擊ゝ高ゝて

秋西

傾ゝまし一里ゝとられ秋の西
こゝろも浦ゝて

秋北西

秋北西ゝくゝゝ日も入ぬ
星合ゝ高ゝ秋やあきの西

秋的西

あき芋ほしゝ秋八ゝ秋の西

秋駕

秋の夜や星ゝうけゝゝ注面

秋

ゝとしてゝ人ゝ人ゝゝゝ秋の秋
秋ゝゝゝ自ゝゝゝゝ八ゝ蕉ゝ

悼如東貯蓄桃

蜻蛉

蜻蛉の人は秋を連てり

蜻蛉の十月に入て柿枝を

蜻蛉は水にうつりて色まがし

寒くなりはあきれ蜻蛉は残れど

紀貫之

淋しきは蜻蛉なりき柿の枝

とうがらしや柿の実は作柱

長寒

枸杞は実乃こぼれて寒しやこ

り秋

り秋は秋はりとてあるなるべし

り蜻蛉やむらしら地蔵はまだ

秋名残

名残惜き秋やあるべき西行法

冬之部

初時雨　まつしらぬ時雨ぞふる

かもとゝく冬ハ来ぬよりの初時雨

鳴海しぼりの部ゆう草鞋の緒

家たゝまはもう雪ゆり来る　初時雨

しらゝやはかの小車は花の上

時雨

一ぢゝ二ぢゝ雨ぞしぐれ　明石

朱雀門

さゝ波やさゝ波ぶくしぐれ

新居やさく人ゑやしに小夜時雨
山茶花をとりけらし時雨哉
時雨より時を水松哉夕不那
蓑ゝゝや何をちらすよ村し雀

芭蕉居忌

世を捨て人まねすなの時雨哉
大ゝゝ松も時雨ゝ身拵
ちるゝゝや書うけ時雨ゝ変まて
しらぬ色てそいうもあるる夜の月

り違ふ春のいとし亀うき
仲彦

洩る月となくまたうれの時雨

茶室迎去

宮ゝゝゝゝゝゝ時雨の書のうけ
夜しらぬ小鮎捨ゝ白しぐ

送百瀬玉民帰奥州

ちるあまりもおなしこゝろ
人はまゝ世をうるき 孫乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

友菓屋のあるじ[illegible]

[illegible]

[illegible]

白居老人を悔む

[illegible]

[illegible]

霜

[illegible]杉や柏も　楓乃も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

素河か庵を開けて
是より雲の田斎を庵の窓
蕉扇巻に集会は夜祝儀
凡董と云ふ命終ゆよし
去来しかれハ興さめぬるより
以むかふしも絵白とならしその
夜は集会追慕は俳諧を
年しぬ事はけれと都にあり
名から方遠して参ゆりしを

歎くやし
おもて帰る人もまた雲起は徒露かな
雛かの
まてしかるまし海遠を雲の景れや
鶴沼乃きしを経こなり閑小
ゆく
きしも鳴太も雲東は山也
君か意
剃刀手きりうこゝは雲千夜や

木枯

木がらしや けさいふえる心の鴨

風や海 一きいろり 出る月

木がらしれ吹や仲木もうえぬ日もなし

木枯や吹止 鳴るやしきぶ

小俳里

こがらしや 鶏の世ゆまでも雪れ宿

木枯や 寄いくきもの 蕎れ寄

梅向 二句

ちらしとも 木がらしれ苔の上

おりしやは 日よりの 蕎れ寄

寄蕎麦 新れ杉 根ばとまし 寄

蕎麦 蕎麦 新れ杉 根ばとまし 寄

何の木と 少しは 蕎の蕎麦

内はすの

物中は 柿一色れ 知らぬ

新しや 蕎麦 蕎麦 柿の上

不破れ関して

寄ちけて 異物 蕎麦

木仏の実を踏おしうゑ蔦
大和の国をけ帰しこの
献火の山をいつこ耳今山八
ともさもさ孫ちらく水
乃ちうとうと懸走のうち
うとと呼うけてのうく
のかんのうくうの回むと
動りけと笑うもうきも
なうは

はんと耳なうく山を蔦蔦搔
蔦蔦はと下於呼うきの於蔦葉うき
うううは言ひして事蔦蔦で
つもつ蔦ん出ちう衣を八をとと
蔦の中も一木ちう蔦蔦
切うもうも軒ユ平ちう蔦屋で
逢坂や山ちう出ちう蔦の蔦自松
梅葉ち化亭うく

木紫　ちうう や木を懐氏のを化のう

うし道の祇家に志める木は家に

柳枯
清たきや木の葉に吹ぬかしく

枯雪
家のからし漁村の柝を年ふりし
むつかしし住や梅花の匂ふ家

訪野雀
枯しや比良に比叡に庵の犬

詩仙堂帰路
丈山のもとしるかり梅花で
かつれたる入むかしの水酒里

かれ野来し河原葉山子に客四人

枯尾花
逆らしておのらぬものにも枯尾花

蘭屋にまかりて
尾花かれくて鐘らしく乃窓や

大魚追悼
淀と文
かまりし八百よ枯尾花

蕉和
難波清水
とあ米かれかも三人四人

枇杷園
まきちらして雛盃と

少くともうかんしき文
かなしは目をとゝのる奥さま
ゆしの日つゝもつひとゝか
蕪根けといふゝと葉て
酒肴　むかてぬもまき
しらをとゝなしこう
臭ひ身めうして
ゆゝふゝ
蕪根汁　葉や夏花と刈ゆゝ

冬枯　冬ゝれの池ゝ
冬ゝまや板戸ゝむ朝夕枯
冬枯や路ゝ立葉ゝ
蓼花　蓼の葉ゝ行ゝ
蓼の花の花ゝ三月乃白ひ
帰花　帰花一ゝ
枯芦　ゝゝのある芦ゝ枯茶ゝ
大根引　丈山ゝ
待雪　ゝゝ

雪や雪へ三ヶ月雪ヶ山の上

初雪

ちる雪や人けなきる桂　公

起れ焼土を見めぐる子

人くの乃家居をいまし三ツ

一ツもたゝぬ夷石ムさ月雪

桂こゝ菓をひらう蕾こゝ

ちる雪乃都ゝもる板戸ゝ

初雪ゝ雪れるとの名のつも

恵波海　桂ちるゝ自れちなる裏須海

寒さ

人雪れ郭ゝ名をてりさむさ

雪ゝ名ゝ乃ゝ雪ゝ叫雨すゝ移ゝ照ゝ雪し

星の雪のゝ雪ゝてりさむさゝな

葉君波仙

舟ゝ雪ゝ月れゝ雪ゝ也ゝ雪さゝ

袁傷

星のちりゝなる板ゝの雪ゝ

綱代

宇治ゝ雪あゝ綱代ゝゝゝ里ひゞ

綱代守波ゝ山乃六ゝ雪ゝ

三河にて

千鳥

生海苔千を神の斎さよ時千鳥
こおやを多き入る山乃まれ
朝花さの多多ふるさとの多ぶ
身代や千多待乃れ磯まり
多ふしハ筆とつよ千鳥ぶ
柿ちや義のらもも多く多多
千多詰ふ中よ吾めれ詰
ふしつけ蜘つけや人も巣紙ハ生葉

水鳥

水多や多く動く人れ影
水多れつれ多多深蒙ぶ
廣津や多よ鴨なく星のけ

鴨

五道亭

鴨れ多けも枯芦蒙ぶ
蒙鴨や等て鴨の多　鴨の多
木曽川にて

鴨れ蓉よ舟蒙ぶ早漕ぶ
炭彩立人二瓢を多多

ゐもうを袖にして東武る
俱しひしらもらの壁上に
寂て空房をまもりしむ
ものやあるじ人帰るまく
花を鴨の多ゐくもうく鶴
大佛寺
湖を鴨て埋る東門の邦
家あてらもうあ生面嵐さ

蓮海嵐

麵

炭

蓮海嵐しも物のうらぐ
鶴舟やはつつまるらな枝の雪
東京の雪をもうい姿り炭
峯の雪宮居炭舟りう
夕ゆやゆ炭こ冴しう門の茅
伊賀伊勢の雪畑を結ぶ炭
雪ふ清瀧ようしまう白髮ぶ
笛よ言あり金松ようる終松
方をしむもしや金のあしも

金

紙子

古里にきく衣うらなり古紙子

冬籠

冬こもり鳥も客ハぬいのしくれ

冬籠大黒地灯ともしけり

蕪まくらにしたる枕もあり冬籠

冬木立

こゝろすゝきし一葉二葉や冬木立

冬木たち誠の志し山志し枕とる

芭蕉翁百回忌千句

発句

ちかまによるこその無量あり冬木立

雪

市川白猿かりぬし春識

よりまハ風かへしよ

白猿死して冬木立とそ賤まかる

紀多よ居をもとゝ銘市よ書添し

書そ雪の遠山にてよかりし

丙寅十二月朔日第一日

一句井

うき雲や雪さみしくの築の丈

水に近し雪とか入唐乃網

雪といふの中は格ありと鉢の雪

月雪花をあるとき氣風清ぶ

曙やあるしらしらと雪は堪もく

月の雪うすくうすく休の移

降雪はあやみくもあるあるしき

雪雪居は春と雪休雪の

夕ましをいつまでもいつまでも三井

寺の雪鳴て湖上雪しと

さしもきや

新しい蛙を雪しもの雪のうすうす

雪のうすあるもの雪の降とてはうある

一句 井桂裏追悼

降雪はしらしらも物のこゝ物ぶ

雪ゝ山もとて馬は壁雪陣氣

夕ましのうゝ女里や雪寄しゝ

月雪やこゝしの月と雪の内

志ゝうしゝ物ふし物は人雪はる

降雪の三井寺といつも身和ど

暁更ふやこゝろ有て伏しめしと
半て絶る
雪を賞を植て枯ぬ[illegible]ちきりなれ
一句 井 雪見
人も云こしの乃雪も飽ぬけ
雪見毒茶 結 独て庵り市利
日の暮る方り西なり 雪の原
さゝつても雪を降なり奥山家
中支 掃やゝ家あゝ事て 雪雀

面白のうき世や雪の馬車
花咲ぬ山買まゝん唐の雪
守武 風
玉裏まて寄妙なる細工の那
うゝ[illegible]年の屋妙な裏
雪
水桂
日は新[illegible]は玉の多
勝山を舟うゝ下せは爰弁
引まゝしてりを見ん風
ちゝく雪まゝ降て雪ち

けさ雪を微雪

ちる波 ちりけてはゆるる小垂ぶ

夢水 ちりや小椰の花の名

冬至梅

唐の高八号伊勢人 冬至梅

葱

小武郎 ちまい 端もうち 根深畑

本兎

木兎や回し ちゑて白 ます白

蕗

蕗坊や 秀ゑ久 ち 芳 淺 茅 生 小

青蕗も 言をや 嗚ゑん 苔ノ 雨

冬月

ちくまても 冬ゆ月

さてもと 苦ふ冬の月 夜ぶ

やくを 丸く 冬月 冬乃月

冬の月 ちまゆをとりみる人 もうな

玉帚 青 妹 を 坊 ゆ 夜 ハ

月ゆ 言 ふき 嗚 く言し

さもし ちゆし き こ ゆ

ちれて ちりひふたる 夢乃

ちを りゆ ほりて その 雪の

地形に生をし見ゆなり
松山はゆり也冬の月夜か
さめ／＼と降出し声や冬の月

火桶
抱て桶富士の嶺や遠つらん
月さしひて志賀れ縁きく火桶か
待わびや梅よ火桶のあたゝまり

火燵
出て果しゝわれり吉もこたつか

河豚
ふく喰ふて蘇生は誰の浮世か

冬
しらしらい冬てはあらそ云ま　樵

冬日
冬のみや蕪菁て去良影法師

馬上吟
冬の日は粉うくしや石語山

冬夜
冬の夜や繕て又嗅ふ沖の多
冬ぬ夜らきく背しあき小家か

冬雲
棺妻のあり夜りしひぬ冬の雲

冬雨
水音の歌申に篭て婦申は翁

顔見世
柳子柿をむまあり嗅に顔見世よ

寒月
寒月ふよりきり雲のちらりり奈

心中して高い松も書き月夜ぶ

松火焚くけよ足袋さらば女ゐれ

東雲や月夜衣裳を対面ならん卯

あしもなきゆ雁光の友をちたなき

かな長川や西ゆきこゑを郭公

義ゆりやみもり金ふちちさ家

涼をはおもめてりぬきち角き

神たくきちりつきこまるこひさや

さく掃やを蓮のうつに鳴くく夜

足袋

郭公

野秀真亭

すくもきやや船の角くる霧のけ

さくさくと見

もをしり先くさくる眼角か

吹さハく夢や志くくの岸の松

月雪や人くをいくくれをにに

早場

中のくくえあくし年の粉

歳末

東日も富条もくくり唐の条

り年

くくゆくや雪と四隅くう先桂

年暮

行年にうつりもせぬ山家かな

蝶鳥乃こゝろもしらて年の暮

年こしや小雪ふり

来る月、市上に立て帯を截

残具ふれ

やとしられぬ松立る角力の行かへりかな

榾くしともれまとしも一ゝ年

花月一樽のあそびもふゆの

ねも睦月かくれ結こそとしの

年やも一瓢の酒の跡まくらかな

来るとし

瓢箪て餘地すらし年のくれ

年内立春 としいたまゝ春立まくら 青莚

松

雜之部

月花を捨てこそ捨て春は春

数多松葉ながら松

月雪はなくてこそあれ八雲一木の事

大黒賛

花と宴と四方のやうなる春

さて傳へかしこき世の御代

むとしやさて佛もこしらへ

石の大黒六十賀

竹

鶴

亀

路

富士

[illegible]

山遠き映山亭にて

[illegible]

倉作

[illegible]

九月十[illegible]日 [illegible]

[illegible]

[illegible]の間小[illegible]の不二の山

無題

懐古

[illegible]

[illegible]の四十の賀

[illegible]人の孤[illegible]

大日本國郡全圖

彩色摺箱入　全二冊

此六十余州の全國八十八經國の大業に志ある人をして地の理を知らしめ歷歷の窮經國順拜の人と勝槩古跡と探り神社佛閣名所旧蹟必用の書なり切諸もの圖しの城下郡縣村落山河小なるまで盡く彩色とあて一覽するに易かしむ実に東路菊が積年の工夫とはいて如新大成なり古今地圖の書の觀るものあり必ず此圖を所望せらるべし

尾陽名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎
東都　京橋南傳馬町二丁目　同　出店